20054

大動脈バルーンパンピング装着中の穿刺部血腫ー同一術者による連続103例での検討ー

[1]鳥取赤十字病院、[2]鳥取赤十字病院

細田　　千昭[1]、森谷　尚人[2]

背景：大動脈バルーンパンピング(IABP)は心臓の後負荷軽減、冠血流増加の作用を有し、心源性ショック/急性循環不全の際には大変有用なデバイスである。一般には安全に使用し得るが、抗凝固療法下での使用のため時に血腫形成が問題になることがある。目的：IABP 装着中に穿刺部に血腫形成をきたした症例の特徴を明らかにし，予防策を講じること．対象：当院において2005.5 より 2009.6 までに同一術者にて IABP を装着した連続103 例．方法：年齢，性別，身長，体重，大動脈蛇行の有無，術前抗凝固/抗血小板剤使用の有無，留置期間，使用シース，対象疾患，血液データについて検討した．結果：全症例中 IABP 装着中に穿刺部血腫形成をきたした症例は6/102 例(5.9%)であった．血腫形成群では明らかに年齢が高く，身長/体重も小さい小柄な人に多く認められた．また特徴的な点として，使用シースを2006.8 より現在のタイプへ変更してから著明に血腫形成が減少した．2006.7 までは4/32(12.5%)の頻度であったが，2006.8 以降2/71(2.85)となった．考察：血腫形成には年齢による動脈硬化の程度の影響との関連が考えられた．またシースの先端部のキレの影響も大きいのでは，と推測し血管モデルによる実験を行った．その結果シース先端のキレの違いにより穿刺部からのリークの可能性も示唆された．結語：高齢者(特に女性)では穿刺部血腫のリスクが高く，キレのいいシースを使用することがひとつの血腫形成予防の方法と考えられた．